

第 14 冊

『平城京 全史解説』

～正史・続日本紀が語る意外な史実～

大角修、学研新書、2009年

(下)

天武系から天智系へ

大角修氏の『平城京 全史解説』の3回目、最終回になります。

奈良時代の政治は下記の7組の人間が、ほぼ10年おきに権力を交代して握ってきました。

藤原不比等 → 長屋王 → 藤原四兄弟 → 橘諸兄 → 藤原仲麻呂 → 道鏡 → 藤原百川

藤原氏→反・非藤原氏→藤原氏のように権力が移っていくのが特徴でしたね。アンダーラインの3人が反藤原・非藤原氏ですね。

今回は、最後の二人道鏡（どうきょう）と藤原百川（ももかわ）の時代を扱います。孝謙上皇、称徳天皇、光仁天皇の時代になります。

道鏡事件

藤原仲麻呂＝恵美押勝が反乱を起こした背景には、**道鏡**という僧侶が孝謙上皇の身近に仕えて、非常に寵愛されている、ということがありました。道鏡が看病禪師として孝謙上皇に近づいていたんですね。

道鏡は禅行（山林修行など）で知られていて内道場の禪師（宮中に仕える僧侶）となりました。天平宝字5年に保良宮に行幸した時から、上皇の看病に当たり、寵愛されるようになりました。そのことで、淳仁天皇と上皇は不和になり、平城京に戻った後は上皇は別宮（法華寺）に移ったといえます。そして藤原仲麻呂の乱は、道鏡と孝謙上皇を一層近づけることになりました。

『平城京 全史解説』で大角修氏は以下のように説明されています。

天平宝字8年9月18日に仲麻呂が死んだ後の9月20日、孝謙上皇は詔で仲麻呂を「逆（さかしま）に穢（きたな）き奴（やっこ）」と口を極めて非難する一方、「此の禪師の昼夜朝廷（みかど）を護り仕へ奉るを見るに」、先祖は大臣（おおおみ）として仕えたであろう位と名を受け継ぐべき人だと道鏡を褒めちぎり、「此の道鏡禪師を大臣禪師（だいじんぜんじ）と位は授けまつる事を諸（もろもろ）聞きたまへ」と宜りたもうた。その理由は、上皇自身が袈裟（けさ）を着ていても政治に携わらざるをえないのは、經典に「国王が王位にある時も菩薩の淨戒をうけよ」とあるように、出家して政治を行うことに障りはない。帝が出家している世には出家の大臣がいるのが当然だということだった。

この時上皇は尼寺の法華寺にいたから、詔を承りに行くにも男の官吏では具合が悪い。僧侶の道鏡を経なければ何事も通じなくなっただろう。

この事態に、淳仁天皇も「道鏡禪師を大臣禪師とす。所司宜しく此の状（さま）を知るべし（担当の官人は事情をくんで計らえ）」と勅し、大臣に準じる封戸（2000戸）を与えた。・・・・・・・・

天平宝字8年10月9日、淳仁天皇の中宮院は兵数百により包囲された。帝位には正しく淨い心を持っている人を付けるべきなのだが、今の帝（淳仁）を見てみると、その位にふさわしくない。そればかりか、仲麻呂と共謀して朕を排除しようとしたというではないか。また、ひそかに6000の兵を集め、朕を討ち滅ぼそうとした。それ故、帝位を剥奪して親王の位に戻し、淡路国の公（きみ）に退かせるという。

ただちに淡路公すなわち淳仁廃帝は、母とともに・・・淡路に護送された。そして、廃帝のこの日には、舍人親王系の二人の親王（船親王と池田親王）が隠岐や土佐に配流（はいる＝島流し）された。

それだけではない。淳仁廃帝のその日、孝謙上皇は重祚し、再び皇位についた。しかし、『続日本紀』にはその記述はなく、翌年から「称徳天皇」の代とされている。その名は、前に淳仁天皇から贈られていた尊号「上台宝字称徳皇帝」による。

なんと孝謙上皇は淳仁天皇を廃して、自分が再び天皇になったのでした。ちなみに、**淡路廃帝**を復位させようとする動きがあり、また淳仁天皇は脱出をはかったとして都に連れ戻され、翌日、亡くなったといえます。果たして、殺されたのでしょうか？

一方、淳仁廃帝が亡くなった10日ほどたって天平神護元年（765）閏10月2日、**称徳天皇**は道鏡を**太政大臣禪師（だいじょうだいじんぜんじ）**に任じると詔（みことり）しました。

さて、**孝謙が称徳として再び皇位につきました**が、質問です。元天皇が再び皇位につくことを「**重祚(ちょうそ)**」と言いますが、重祚した天皇は彼女を含めて二例しかありません。**では、もう一人の重祚した人物は誰でしょうか？最初の名前と、重祚した天あとの名前、両方とも教えてください。**

これは、基本中の基本ですね。**皇極天皇が斉明天皇として重祚しました**ね。乙巳のクーデターの時の天皇ですよ。そして、皇極天皇が譲位して孝徳天皇が就任し、難波に都をおきました。皇極の息子が天智天皇であり、天武天皇ですね。

それでは、もう少し『**平城京 全史解説**』からみていきましょう。

称徳天皇は、太政官の長は左大臣だが、ふさわしい人物がいる時は大臣を置いている。我が師の大臣禪師が朕を守り助けるのをみると太政大臣にふさわしいので、太政大臣禪師の位を授けるといふ。そして、それを禪師に言えば必ず辞退するだろうから、本人には何も言わずに位を授けた、と。

称徳天皇は文武百官に詔して太政大臣禪師を礼拝させます。その後、弓削寺（道鏡の生家の氏寺）に行幸して、唐楽・高麗楽や舞を演じ、禪師に真綿1000屯を与えました。・・・・・・・・

10月20日、隅寺（すみでら、海龍王寺）の毘沙門天像から現れた舍利（仏の遺骨）を法華寺に納めます。さらに、朝廷の役人たちに舍利を礼拝させた上で、道鏡を**法王**にするという詔が宣じられました。

翌年の3月20日、法王宮職（ほうおうぐうしき）が設置されます。なんと、朝廷とは別に、法王の役所を造ったのです。

8月16日には、**神護景雲**と改元されました。

神護景雲2年（768）2月18日、正三位弓削御浄清人（みきよきよひと）を大納言とし、内豎卿（ないじゅきょう、天皇の近侍の長）、衛門督（衛門府の長官）、上総の国守の職はそれまで通りとするとの布告がでました。この弓削御浄清人は道鏡の弟です。

道鏡の栄達とともに、その一族からは五位以上に10人も取りたてられていきました。とくに内豎卿は天皇の勅を宣告する役であり、称徳天皇が道鏡の一族に取り込まれたことを示しています。

神護景雲3年9月25日、大宰府の神官が驚くべき内容の八幡神のお告げをもたらします。それは「**道鏡を皇位につければ天下泰平であろう**」といったお告げです。

称徳天皇も八幡神の使いが「法均尼（ほうきんに）の派遣を請う」という夢を見ます。法均尼は和氣清麻呂の姉です。そこで、天皇は姉に代わって**和氣清麻呂**が宇佐に行き、八幡神のお告げを拝聴せよと命じました。

清麻呂が出発する時、道鏡は大神が使いを送れというのは「蓋（けだ）し我が即位の事を告げむが為ならむ」と和氣清麻呂に耳打ちし、そのことを心得て神託を以て帰京すれば、「重い官職でむくいよう」と言ったといひます。

しかし、和氣清麻呂は、それに応じませんでした。そして、彼が持ち帰った八幡神の神託は、「我が国開闢（くにひら）けてより以来（このかた）、君臣定まりぬ。臣を以て君とすることは未だ有らず。天（あめ）の日嗣（ひつぎ）は必ず皇緒（こうしょ）を立てよ。無道の人は早（すみやか）に掃（はら）ひ除くべし」というものでした。

これを聞いた道鏡は大いに怒り、和氣清麻呂を解任して因幡国員外介（いんがいのすけ）に左遷しました。さらに位階・勲位を全て剥奪して大隅に配流しました。姉の法均尼は還俗させて備後国に流しました。称徳天皇も怒って和氣清麻呂の姓を取り上げ、「別部穰麻呂（わけべのきたなまろ）」と名づけたのでした。



現在の宇佐八幡宮

『平城京 全史解説』を続けましょう。

八幡神の神託が失敗に終わった後の10月30日、今度は由義宮（ゆげのみや）を西京とするという詔が出された。由義宮とは、道鏡の故郷の河内国弓削郷（大阪府八尾市）にあった行宮（あんぐう）である。称徳天皇の行幸は天平神護元年（765）10月29日が最初で、とにかくそこを平城京の陪都にする、というのだ。それで、道鏡の弟の弓削清人らが中心になって造営を進めることになった。

神護景雲3年11月9日、天皇は平城京に戻ったが、あくる4年の2月27日にまた由義宮に行幸。しかし、天皇は由義宮に行幸してまもなく病気にかかり、すぐに平城京に戻ったが、それから百日あまり後に没するまで、自ら政務を行うことはなかった。

天皇の病氣は2月23日に西大寺で砕いた大石の祟りだという。

天皇が病床にあった4月26日、6年前の恵美押勝の乱を平定した時に発願してあるものを造らせます。高さは4寸5分の三重の小塔百万基です。それを諸寺に分けて奉安します。この小塔は法隆寺などに今も多数現存しますが、内部に納められた木版刷りの陀羅尼（だらに、呪文）は日本最初の〇〇〇として有名ですね。

問題ですよ。教科書にも出てくる百万塔陀羅尼ですが、〇〇〇に当てはまる言葉は何ですか？

そうですね、「印刷物」でした。

8月4日に、称徳天皇は平城宮の西宮寝殿で崩御します。享年53歳でした。左大臣藤原永手、右大臣吉備真備らが宮中で協議し、白壁王（しらかべおう）を皇太子に立てます。白壁王が光仁天皇になるんですかね。

さらに、光仁天皇は詔を出し、道鏡を下野に左遷させます。僧尼の刑罰は最も重い場合で、還俗でした。それ以上の刑罰を科す時は、還俗させた上で処罰したそうです。ところが、道鏡の場合、左遷とはいえ天下の三戒壇の一つである下野薬師寺の造営長官ですから、高位の身分のままですよ。無茶苦茶甘い処分じゃないですか。なぜ、そんな甘い処分になったのでしょうか？

大角修氏は、おそらく「禪師」の呪力を恐れたのだろう、と考えています。確かにそうかもしれませんが。長屋王の祟りは大変強力で多くの人々が天然痘で命を落としました。道鏡の場合、法王という天皇に匹敵するほどの高い高い位に就いています。そんな法王、禪師に崇られたら、平城京はとんでもない事態に見舞われてしまうかもしれません。それはかんべんしてほしいですよ。

もうひとつ質問です。先ほど「天下の三戒壇」という言葉が出てきました。1つが下野国薬師寺でした。残る二つは何でしょうか？

ちょっと難しいですか。残りは、大和国東大寺戒壇、筑紫国観世音寺戒壇の2つでした。



下野薬師寺跡

皇統が天武系から天智系へ

さきほど、**白壁王が光仁天皇**になったと書きました。じつは、これってとっても大事なことなんですよ。**山川出版社の『詳説日本史』**には次のように書かれています。

「つぎの皇位には、**藤原式家の藤原百川**らがはかって、**永く続いた天武天皇系の皇統にかわって天智天皇の孫である光仁天皇が迎えられた**。光仁天皇の時代には、**道鏡時代の仏教政治で混乱した律令政治と国家財政の再建がめざされた**」と。

白壁王は施基（しき）皇子の子で、天智天皇の孫です。奈良時代の天皇の系統はずっと天武天皇系の皇統が続いていましたが、白壁王が光仁天皇になったことで、天智天皇系の皇統にかわってしまったんですね。百年を経て天智系の天皇が誕生したということになります。

しかも、白壁王が皇太子に立てられた時の年齢はというと、なんと62歳でした。還暦過ぎてますよ。こんな立太子は異例中の異例でした。なぜかというと、対立する勢力の妥協の結果、中継ぎの皇位推戴（すいたい）だったのです。

というのも、光仁天皇の妃の**井上（いのえ）内親王**は聖武天皇の皇女ですから、白壁王は天智天皇の孫であるとともに、聖武天皇の娘婿（むすめむこ）でもありました。その立太子は、天智系をおす勢力と天武・聖武系をおす勢力の妥協の産物だったのでしょう。

その協議の中心にいたのは、左大臣藤原永手と右大臣吉備真備でした。しかし、吉備真備は光仁天皇が即位した7日後に、高齢を理由に辞任を願い出て許されます。

翌宝亀2年（771）1月23日、光仁天皇は井上皇后の子の**他戸（おさべ）親王**を皇太子にします。次には聖武天皇の孫が皇位を継ぎ、天武・聖武系の復活が予想されました。しかし、2月22日、左大臣藤原永手が58歳で没し、ここで再び政変が起きます。

宝亀3年3月2日、井上内親王が巫蠱（ふいこ、呪い殺そうとするまじない）の罪により、皇后を廃されてしまいます。この巫蠱は相手も理由も不明なのですが、不和だった光仁天皇にかわって称徳天皇のように帝になろうとしたと噂されました。

光仁天皇・井上皇后の仲は、当時の朝廷において天智系と天武系の争いが起きていたために、少しずつ引き裂かれ、そして、それが不和につながっていったのかもしれない。その隙を突く者がありました。後代に力を伸ばした**藤原式家の良継（よしつぐ）・百川兄弟**の企みだったという噂もあります。

藤原百川が出てきました。百川は

「ひどい 長屋に 四人の子ども も なか どう 百円で」

の「百円で」の部分の人物ですね。

奈良時代の権力者は

藤原不比等 → 長屋王 → 藤原四兄弟 → 橘諸兄 → 藤原仲麻呂 → 道鏡 → 藤原百川

と動いていったと、以前触れましたが、藤原百川が登場してきました。彼は藤原式家です。

話を元に戻しましょう。そもそも「皇后が巫蠱を行った」というのは何年も前のことなんです。はなはだ真偽の怪しい話です。その廃後の詔にも、巫蠱を「謀反（むへん）」というだけで具体的な内容はなく、次のように書かれています。

「裳昨足嶋（もくいのたるしま）が謀反のことを自首してきた。もう年月がたったことだが、法にてらせば罪がある。しかし、年月をへても自首したのだから、冠位を上げる」と。

律令の法にてらせば謀反は斬刑の重罪なのですが、なぜか裳昨はほめられ、なんと従七位から外従五位下に格段の出世をしていきます。なんかくさいですよ。

5月27日、他戸（おさべ）親王の皇太子を廃し、庶人とする。その理由は、母の井上内親王が魘魅（えんみ、呪い人形などを用いる呪術）によって大逆（たいぎゃく）をおかしたことが一、二遍にとどまらないということでした。

あくる宝亀4年正月2日、光仁天皇は山部（やまべ）親王を皇太子にします。山部親王は百済系渡来氏族から迎えた夫人高野新笠（たかのにいがさ）の子です。ここに天武・聖武系皇統の排除が完了したように見えますが、山部親王の母の身分が低いこともあり、皇太子の地位は安泰ではなかったようです。そこで、さらに徹底して聖武系の排除が行われることとなります。

10月14日、光仁天皇の同母の姉難破（なにわ）内親王が亡くなりました。それに引き続き、10月19日、井上内親王と他戸親王の母子が大和国宇智郡に幽閉されてしまいました。その理由が、以前、井上内親王は巫蠱の罪で皇后を廃せられたにも関わらず、今度は難破内親王を魘魅したからだということです。

これって、無茶苦茶の難癖、言いがかりですよ。長屋王事件の時と同じように、無実の人間を犯罪者・謀叛人に仕立て上げ葬り去るといふ、またまた藤原氏の得意技が登場してきます。

でも、井上内親王と他戸親王を追放しても、他戸親王の復位を求める動きが多少はあったようです。そこで、宝亀6年4月27日、「井上内親王、他戸親王、並に卒（そつ）しぬ」という事態が発生します。

えーっ、井上内親王と他戸親王母子が同時に死んだって！？ そんなことありえない！！そう思いませんか。とっても不自然ですよ。確かに、未来を憂えた二人が服毒自殺した可能性はあります。でも捕らえられた二人がどうやって毒を手にいられるのでしょうか？無理に決まっていますやん。

だから、これは暗殺以外の何ものでもないと思います。たとえ、二人が「自主的」に毒をあおったとしても、そうせざるをえない状況を作り出したのは、光仁天皇や山部親王（のちの桓武天皇）、藤原式家なのですから。

天応元年（781）4月3日、光仁天皇は病のため退位して山部親王に譲位します。この時、光仁天皇は73歳、山部親王つまり桓武天皇は45歳でした。同年12月23日、光仁太上天皇が亡くなります。**桓武天皇**の時代が始まります。

『平城京 全史解説』で大角修氏はこの後のことを、次のように書き記しています。

なお、桓武天皇が即位した翌日、同腹の弟早良（さわら）親王が皇太子に立てられた。早良親王は出家して東大寺の僧になっていたから、これも思いがけないことだった。まして、それが怨みの自死につながろうとは、この時誰が予測しえただろうか。

長岡京遷都にまつわる事件を暗示していますね。でも、早良親王の事件については別の機会に触れたと思います。はっきりしているのは、井上内親王と他戸親王を死に追いやったから桓武は天皇になれたということです。誰かが忬度（そんたく）したのでしょうか？自ら「手を下した」のでしょうか。それは、わかりませんが。

なぜ、四字元号？

さて、今回の『平城京 全史解説』を見てくる中で、少し違和感というか、気になることはなかったですか？

それは、「天平宝字」とか「神護景雲」のように、四文字の元号が登場している、ということなんです。あまり気にならなかったですか？

今の元号は「令和」で、前をたどっていくと「平成」「昭和」「大正」「明治」と二文字の元号です。また、日本史に出てくる「大化」の改新、「応仁」の乱、「元禄」文化のように、元号はやはり二文字ですね。

でも、今回の奈良時代には、729年から20年間続いた「天平」の後に、

天平感宝（749年4月～同年7月）
天平勝宝（749年～757年）
天平宝字（757年～765年）
天平神護（765年～767年）
神護景雲（767年～770年）

と、上記のように、約20年のあいだに漢字四文字の元号が立て続けに登場します。これをみると、あることに気づきますね。四字元号は、実際には「天平」という2文字を共通の元号として残り二文字を変更してるだけですね。最後の2つだけは「神護」の二文字の配置を逆にしていますが。

なぜ奈良時代には四文字の元号があるのでしょうか？

それは、中国の唯一の女性皇帝である則天武后（そくてんぶこう）の時代に使用された四字元号をまねた、ということらしいのです。

日本最初の四字元号である「天平感宝」は光明皇后ならびに藤原仲麻呂が中国の則天武后の例にならったものという指摘があるそうです。なにせ、藤原仲麻呂といえば、「中国かぶれ」の人物でしたよね。

則天武后の時代には、「天冊万歳」「万歳登封」「万歳通天」というように四字元号が用いられています。しかも、中国の歴史においても他に例をみないそうです。

大角修氏の『平城京 全史解説』を3回にわたってみてきました。奈良時代のことが深まったでしょうか？奈良時代のことを身近に感じることはできましたか？もし、そうなら、嬉しいのですが。

あなたが、受験生でしたら、奈良時代の7組の権力者、その変遷をしっかりと頭の中に入れてください。それが、記憶をするときの「核」＝「雪だるまの芯」になりますから。

藤原不比等 → 長屋王 → 藤原四兄弟 → 橘諸兄 → 藤原仲麻呂 → 道鏡 → 藤原百川

今回も、最後までお読みいただき、ありがとうございました。

